



TITLE:

資金とその量定

AUTHOR(S):

小島, 昌太郎

CITATION:

小島, 昌太郎. 資金とその量定. 経済論叢 1937, 45(4): 464-485

ISSUE DATE:

1937-10-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/131013>

RIGHT:

京都市帝國大學經濟學會 經濟論叢

第四卷 第四號

昭和二十年十一月一日發行

論叢

新刻天工開物及支那工業管闡……………法學博士 財部靜治
資金とその量定……………經濟學博士 小島昌太郎
貨幣本質に關する若干の問題……………文學博士 高田保馬

時論

原料統制と輸入統制……………經濟學博士 谷口吉彦

研究

ケインズの『一般理論』に關する諸問題……………經濟學士 柴田敬
チュルゴの租稅論……………經濟學士 島恭彦
再保險學說の發展……………經濟學士 佐波宣平

說苑

ナチスに於ける國民共同體の理論……………經濟學士 中川與之助
移住統計法……………經濟學士 青盛和雄
大都市近郊の農村……………經濟學士 田杉競

附錄

新着外國經濟雜誌主要論題

（禁轉載）

資金とその量定

小島 昌 太 郎

一

資金といふは、通貨の形態に於ける資本のことである。或は貨幣の形態に於ける資本であるといつてもよい。經濟學に於ては、通貨といふも貨幣といふも同一のことであるけれども、貨幣といふ言葉は、法律學的意義の影響を受けて、往々、通貨といふものよりも狹義に解釋せられる虞がある。

法律學に於ては、貨幣とは一定の具體物を言ふのであつて、我が國に於ては、貨幣法の規定する所の金貨幣、銀貨幣、ニツケル貨幣、青銅貨幣の外にはあり得ない。日本銀行兌換券ですら、法律上の意味に於ては、貨幣ではなくして、むしろ有價證券である。況んや、銀行の預金の如きは、法律學上に於ては、債權の一種たるに過ぎずして、貨幣ではない。然るに、經濟學上に於ては、預金は、今日、最も主要なる通貨なのである。

また我が國の通俗の觀念に於ては、日本銀行兌換券は、金貨幣や銀貨幣と共に、これを貨幣と認め、現金といふ言葉を以て總稱して居る。更に金銭といふ言葉と、通貨といふ言葉も、この現金と同様の意味に於て用ゐられて居る。この金銭及び通貨といふ言葉は、我が民法に於ても用ゐられて居る。『債權ノ目的物カ金銭ナルトキハ債務者ハ其撰擇ニ從ヒ各種ノ通貨ヲ以テ辨濟ヲ爲スコトヲ得』（四〇二）。この場合に於ける金銭及び通貨は、貨幣

法に於ける貨幣よりも廣義のものであることは明かである。併しまた、それが有形の具體物たることも明かであるから、結局、それは、貨幣法に謂ふ所の貨幣と日本銀行兌換券、及び特殊の場合には、朝鮮銀行券、臺灣銀行券、横濱正金銀行券を指稱することとなる。すなはち通俗にいふ現金と同じ意味である。

かくの如き法律學上の意義及び通俗の觀念が、廣く世間の人の頭を支配して居るのであるから、吾々が、單に貨幣若しくは通貨といふ言葉を用ゐるならば、多くの人々は、それを右の如きものゝ意味にとるであらう。併し金貨幣や銀貨幣やが、從來、果して居つた職能、そして、兌換銀行券が、最初はこれに代用されて、後にはむしろそれにとつて代つて、果して居つた職能は、今日に於ては、むしろ主として、他のものによつて、果されて居るのである。それゆゑに、この職能を果すために存在し、且つこの職能を果し得るものたるものが、貨幣若しくは通貨たるの本質であるとするならば、金貨幣や銀貨幣若しくは兌換銀行券が然るものであると同様に、今日に於ては、この新らたなる——といつても最早相當年代を経て居るのであるが——登場者も亦、實質的には貨幣若しくは通貨と認めなければならぬことゝなつた。

それは、銀行の預金である。金貨幣や銀貨幣や、または兌換銀行券が、貨幣若しくは通貨と認めらるゝ所の本質的な職能といふは、今日に於ては、單に、交換の媒介といふことではなく、一般的な支拂の決済に充てられるといふことである。支拂は、單に、物品買入の代金や俸給勞賃の場合に限るのではなく、資金の貸借の場合、その返済の場合、資本の投下または移轉の場合などにも行はれる。それらの一般の場合に於て、その決済をなす——言ひ換ふれば、一般的購買力の移轉をなす——に用ゐられるものが、通貨なのである。今日、一般的な支拂の決

済に、預金は、預金のまゝで用ゐられて居る。いな、支拂の決済に用ゐられて居る主要なものは、金貨幣や銀貨幣やまたは兌換銀行券ではなくして、むしろ預金そのものである。それゆゑに今日に於ては、預金なるものは通貨であるばかりではなく、むしろ主要なる通貨なのである。

銀行の預金なるものは、當初は、目前の支拂に充つる必要な現金が、その必要のあるまで、預けられて居るといふ意味のものであつた。その時代にあつては、現金が通貨として主たる働きをして居たのであるから、通貨の本來的な所在は商取引界であつた。そこに現金が流通して居る状態が、通貨の本然の姿であつた。併し今日の發達した金融機構にあつては、銀行なるものが通貨の本來的な所在であつて、そこに預金として潜在して居るのであり、現實に支拂の決済として活動するの必要が生ずるに及んで、或は現金として引出されて支拂に充てられ、或は預金のまゝで甲の所有より乙の所有に移さるゝことによつて、支拂の決済に用ゐられるのである。現金として銀行より引出されて、支拂の決済に用ゐられた後は、多くの場合に於ては、また直ちに、預金として預け入れられて元の状態に復歸するのである。従つて、通貨なるものは、預金として銀行に潜在して居るもので、その一小部分は常に支拂の決済のために現金として流通界に活動しつゝ、銀行に出入して居るけれども、その大部分は、支拂の決済のために働くときのみ、言はゞ瞬間的に活動し、その前後は、常に銀行に待機的姿勢に於て潜在して居るのである。これが今日の進歩したる金融機構に於ける通貨の本然の姿である。

昭和十二年上半期に於ける我が國に於ける手形交換高は、枚數二千二百四十六萬餘、金額四百二十九億四千二百餘萬圓であつて、全國一日平均交換高は、十五萬二千餘枚、二億九千餘萬圓である。この外に、手形交換所に

提出せられずして、同一銀行預金者相互間の振替決済となつたものが、凡そ右の七分の三に當ると推定せられるのであるから、その推定額一百八十四億圓を加算すれば、上半期に於ける手形小切手による支拂は、六百十三億四千二百餘萬圓に達することゝなり、一日平均は略ぼ四億一千萬圓となる譯である。この金額は、銀行の預金が預金のまゝで、支拂の決済に働いたのであるから、實に通貨として働いた譯である。更に私が度々引例する所であるけれども、我が六大都市に於ける手形交換銀行の月末日勘定に於ては、平均的に言へば、その收納金額の僅に一割五分が現金で、八割五分が手形小切手なのである。今日に於ては、銀行預金そのものが、そのまゝの形に於て通貨として如何に主要なる地位にあるかといふことは、これを以て見ても明かであらう。

二

右の如き次第であるから、經濟學上に於ては、通貨は、待機状態に於けるものと、活動状態に於けるものとに分つて認めなければならぬ。前者は、銀行に於ける預金そのものであつて、これは潜在通貨と名づけられ、具體的の有形物ではなく、觀念的な無形のもので、法律學的に言へば、銀行の支拂債務そのものである。

後者は、また二つに分つて認識すべきもので、一つは、預金が預金の形のまゝで、支拂の決済に働くときの活動状態を捕へるのであつて、これを預金通貨といふ。これには同一銀行の預金者相互の間に移動する場合と、異なる銀行の預金者相互の間に移動する場合とがある。前の場合には、その預金は、當該銀行の外は出ることはないのであるが、後の場合には、一つの銀行より出で、他の銀行に入ることゝなる。而もこの場合に於ても、その銀行間に移動する所のものは、それらの銀行が中央銀行にもつ所の預金である。すなはち、Aなる預金者の預金が、

Bなる預金者に移ると共に、甲銀行の中央銀行に於ける預ケ金が、乙銀行の預ケ金に移るのである。

活動状態に於ける通貨の他の一つのは、謂はゆる現金である。我が國に於ては、貨幣法に規定する貨幣と兌換銀行券とである。銀行は、預金者の需めに應じて、その預金をこれらの通貨を以て拂戻しをなす。それは、預金者に於てこれを支拂の決済に充つる必要があるからである。然るに、その支拂を受けたるものも亦或はこれを更に支拂に充つることもあるであらうが、何人かこれを支拂に充つる必要のない人の手に渡つたときには、直ちにまた銀行に預け入れられて預金となる。すなはち、先に銀行より引出されて、再び預け入れられるまで、現金として、活動状態にあるのである。預金通貨に對して、これを現金通貨といふ。

資金といふは、右に述べたる潜在通貨、預金通貨、または現金通貨の形態に於て存在する資本のことである。

三

資本とは増殖の目的を以て保有せらるゝ購買力である。その増殖は、購買力を、通貨たる形態より、通貨以外の形態のものに取り替へ、更に通貨の形態に取戻すことによつて行はれる。通貨以外の形態のものは、有形のものなると無形のものなるとを問はない。假にそれらを財といふ言葉を以て表はすならば、資本の増殖といふことは、資本たる購買力を通貨たる形態より財の形態に取換へ、更にそれを通貨の形態に戻すことによつて行はれるといつてもよい。この場合に於て、財の形態にある資本を、資本財といふに對應して、通貨の形態にあるそれを資金といふのである。

凡そ、生産は、土地、建物、機械、器具、材料、原料、動力、勞力などを用ゐて行はれる。これらのものが資本

財である。企業は、その資金をこれらのものと取替へ——それを資本の投下といふ——それによつて生産したるものを賣却し、通貨を受領することによつて、再び資金として回収するのである。各種の産業は、その活動の方面を異にし、生産物の種類を異にするけれども、その産業的活動の半面に於ては、かくの如き資金の廻轉が伴ふのであつて、これなくしては、如何なる生産も如何なる産業的活動もあることを得ない。資金が豊富なる場合には、産業的活動は圓滑活潑に行はれ、窮乏する場合には、滯滯停頓することとなる。

生産を初むるに當つては、それに必要とする所の土地、建物、機械、器具、材料、原料等を調へなければならぬのであるが、これらのものを調へるについては、先づそれを購入するに足る所の資金がなければならぬ。この資金は、今日にありては、株式、社債、または銀行よりの借入金として社會より集められるものであるから、その社會に資金が豊富に存在するのでなければ、生産計畫を完全に遂行することは出来ない。また縦ひ、生産に着手の際には、潤澤なる資金を擁して初められたる産業であつても、その社會の資金が當時豊富ならざるため、その製品を豫定の代價を以て賣ることが出來ず、または、賣掛金の回收が停滯する場合には、その企業の活動は停頓するの外なきこととなる。實に、産業的活動はこの意味に於て、その社會に於ける資金の存在量に依存するものと言はなければならぬ。然らば、一つの社會に存在する資金の量は、如何にしてこれを測定することが出来るか。

資金とは、前に述べたるが如く、通貨の形態に於ける資本のことである。従つて一つの社會に於ける資金の量は、その社會に存在する通貨の量を以て限定せられる。こゝに通貨といふは、前述の潜在通貨たる銀行預金をも

含めたる意味の通貨たることは言ふまでもない。また、併しながら、通貨のなかには、資金といふに適せざるものもある。例へば、家庭の家計費に充てらるべき手持の通貨、遊覧客の所持金の如きは、通貨たるには相違なきも、その状態にある限り資金と認むることは出来ない。もとより、それらは、その所持者の立場に於ては、資金と言ひ得ないけれども、彼等がそれを支出するに當り、これを受取るべき、商人、生産者、交通業者等の立場に於ては、これを受取ることが、とりも直さず、資金の回収なのである。それらに向けらるべき通貨量の多少が、すなはち、産業界に於ける資金の廻轉の滑澁を決定する所のものである。それゆゑに、一つの社會に於ける資金の量を問題とするといふことは、結局、その社會に於ける通貨の量を問題とすることに外ならぬこととなる。

四

資金の量を問題とする場合にあつて、更に注意すべきことは、如何なる目的を以て資金の量を問題とするかを明かにして置かねばならぬことである。例へば、一定の時に於て、新たに投下に向け得べき資金の量が幾許あるかを問題とするか、現に活動的に投下せられある所の資金の量は幾許あるかを問題とするか、この二つは、その着目する所を異にするの適例である。

殊に資金なるものは、私をして言はしむれば、増加減少する所のものと、膨脹收縮する所のものとがあるから二つの時に於ける資金の量の比較は、その増減を示すものか伸縮を示すものか、その幾許が前者で、幾許が後者であるかを識別するの必要あるものである。そして、このことは、言ふまでもなく、資金の現在量の測定についても、これを心懸けて置かねば、その測定を誤る虞れがあるから、資金の量定については重要な問題である。

資金は、その量定の點に於て、液體——他の物體も總て左様であるが——に譬へることが出来る。液體は、増加減少するものであると共に、膨脹收縮する。一〇〇リットルの水に一リットルの水を注入すれば、一〇一リットルとなる。また、同じく一〇〇リットルの水を加熱すれば、その場合に於ても、水は一〇一リットルとなる。前者は言ふまでもなく増加であり、後者は膨脹である。増加減少は實量に於て生ずるものであり、膨脹收縮は形量に於て生ずる所である。形量は實量に附着したるものである。形量に於ける膨脹收縮は、實量に於ける増加減少を惹起すものではないが、實量に於ける増加減少は形量に於ける膨脹收縮を伴つて起るものである。資金に於ても、これと同様なる事柄がある。

いま我が國に例を求めて、これを言ふならば、生産せられたる金を日本銀行に賣却して得たる手取金十萬圓を銀行に預金すれば、それによつて、その金額だけ資金は實質的に増加する。これが實量に於ける増加である。この場合に於ける外部的現象は、金を受取りたる日本銀行に於ては、所有金地金の在高が、金額に於て十萬圓増加するのであるが、小切手振出高が十萬圓増加する。その小切手は、やがて、金の賣手によつて彼の取引銀行に預金として預け入れられる。その小切手を受入れた銀行は、これを日本銀行に呈示して、その預金とするから、一方に於て自行に於ける預金の十萬圓の増加があると共に、他方に於て、日本銀行に於ける預け金の十萬圓の増加がある。

この場合に於て明かなる如く、金の日本銀行への賣却により、資金は、その實量に於て十萬圓増加したのであるが、その形量に於ては、市中銀行に於ける預金としての十萬圓の増加と、日本銀行に於ける預け金の十萬圓の

増加とがある譯である。そして、こゝに注意すべきことは、預金者がその預金を現金を以て引出をなさず、またそれを小切手にて支拂に充つるにしても、その受領者が、これをそのまま自己の預金となすことを繼續する限りに於ては、日本銀行に於ける預け金と、銀行に於ける預金とは、別々に活動をなし得ることである。すなはち銀行は日本銀行に於ける預け金を、貸付割引または有價證券の買入等に投資し得ると共に、預金者も亦、その預金を支拂に充て、資金的に活動せしむることを得るのである。ゆゑに、活動状態に於ける資金の形量は、二十萬圓となる。この範圍内に於て、これを見るだけでも、資金の十萬圓の實量増加は、二十萬圓の形量膨脹となつて居るのである。資金の増加といふことゝ、その膨脹といふことゝは、これを明確に區別すべきものなることは、これによつて明かであらう。

而も資金の膨脹は、これに限るものではない。いま、預金者は、常に小切手を以て支拂をなし、その小切手はまた、受領者によつて、預金として預け入れられるものとすれば、——これは單なる假定ではなく、金融機構の發達したる社會に於ては、結局、大體に於てかやうな有様にあるのであつて、現金にて引出された場合に於てもそれはやがて、また預金に預け入れられるのであるから、結果に於ては、小切手の場合と同じである——右の銀行に預け入れられたる十萬圓の資金は貸出によつて、更に驚くべき膨脹をなす可能をもつのである。

銀行は貸出をなすに當つては、必ず預金に對する或る割合の支拂準備を保留して、その殘餘を貸出するのである。假に支拂準備の割合を一割とすれば、右の場合、その銀行は九萬圓の貸出をなすことが出来る。それを貸出したことゝする。然るときは、借受者は、その銀行を支拂人とする所の九萬圓の手形若しくは小切手を振出して、支

拂に充てる。この場合に於て、その支拂を受けたるものは、その手形若しくは小切手を自己の預金とする。然るときに、銀行の預金は、九萬圓の増加を來して、十九萬圓となる。この九萬圓は銀行が更にこれを貸出に向け得る所の資金である。併し、それは、資金の實量として増加したのではなく、形量としての膨脹なることは明かである。そして、この九萬圓が、更に一割の準備金を保留して殘餘部分の貸出となつたとき、更に前と同様に八萬一千圓の膨脹を見るのであつて、かゝる關聯が繼續するものとすれば、理論的には、實量十萬圓の資金が、九十萬圓の資金の膨脹を伴ふこととなるのである。すなはち、實量十萬圓の資金は、形量に於ては百萬圓の資金となる可能をもつのである。

いま、實量の資金を a とし、準備率を r とすれば、第一回の貸出は $\frac{a(1-r)}{1-r}$ であり、それはまた預金となると共に、その更に r 率扣除の殘額 $\frac{a(1-r)^2}{1-r}$ が貸出される。それがまた預金となり、 r の準備率を扣除して、貸出され、そのことが、假に無限に——實際に於ては、銀行の貸出として取扱ふ金額の最小額を以て限度となるのであるが——連續するものとすれば、貸出の總額は、

$$a(1-r) + a(1-r)^2 + \dots + a(1-r)^n = \frac{a(1-r)}{1-(1-r)} = \frac{a(1-r)}{r}$$

となる。そして、それが、資金の實量 a より膨脹したる部分である。かくて資金の形量の總體は、 $a + \frac{a(1-r)}{r}$ すなはち $\frac{a}{1-r}$ である。資金はかほどの膨脹性をもつものである。

五

一〇〇リットルの水が、膨脹して一〇一リットルとなりたるとき、その膨脹部分なるものは單に概念的にのみ

認め得るに過ぎないのであつて、現實の水については、そのどの部分を以て膨脹部分であると指定することは不可能である。たゞ一〇一リットルの中、どの一リットルを取り上げても、これを膨脹部分といはゞ言ひ得るのである。そして、その一リットルの水は、他の一〇〇リットルの水と同様に飲むことの出来るもので、水として他の部分と異なる所は全くない。

資金に於ても、この點が、またよく似て居る。實量の資金 a より膨脹したる $a + r$ の資金、そして、その合計に於ては $a + r$ の形量をもつ資金は、資金たるに於て何等異なる所はない。それは、頂金の形のまゝにて支拂の決済に充てられ、土地、建物、機械、器具、材料、原料、動力、勞力等を調達するに働き、或は、それらの生産的活動によつて生じたるは生産物の買入に働くのである。その點に於て、金の賣却手取金そのものより成る所の預金とると、前述の如き貸出の發展によつて生じたる預金とるとによつて異なる所はない。

こゝに於て、資金の實體といふものについて考へて見る必要が起る。嘗て、金貨幣の如き本位貨が、通貨として主要なる地位を占めて居つた時代には、資金なるものは、金貨幣そのものであると考へられて居つた。兌換銀行券が用ゐられるに至つて後も、資金なるものは、結局、兌換銀行券が代用する所の金貨幣であるとの考へ方に變りがなかつたやうである。

併し今日に於ては、資金は金貨幣であると言ふことは無意味である。昭和十二年八月末日に於ける我が國全國普通銀行に於ける預金總額は一百十五億三千五百五十一萬七千圓であるが、これらは、その預金者によつて、支拂の決済に充て得る所の資金たるに疑ひはない。而も日本銀行に於ける兌換準備たる金貨及金地金は、二百九十

ミリグラムを一圓として、同日の現在高は、八億一百万圓である。今日に於ては、最早や資金が金そのものより遊離して居ることは、これを以て見ても既に明かである。

然らば、資金そのものの實體は何であるか。それは一般的購買力である。この購買力は、金貨幣といふ具體物にも現はれ、兌換券の姿に於ても現はれ、また銀行預金といふ状態に於ても現はれるものである。一般的購買力は一般的支拂に充てられ、その具體的なものが通貨であり、通貨の形態に於ける資本が資金なのである。銀行の貸出は、一般的購買力の貸出であり、銀行の預金は、一般的購買力の預け入れである。預金が貸出の振替へられたるものと、然らざる預金たるによつて、異なる所はない。

六

資金は右に述ぶるが如く、通貨の形態に於ける資本である。然らば、資金の増減は如何にして生ずるかといふことは、通貨の増減は如何にして生ずるかといふことと同じことである。

通貨のうち、本位貨幣たる金貨幣は、商品的金の貨幣的金となることによつて増加するものであり、後者の前者に變ることによつて減少するものである。兌換銀行券は、一部分は金貨幣の増減の事情に伴ふものであり、他の部分は、我が國の制度に於ては、一定の有價證券または商業手形を保證とするものであるから、要するに政府及び民間の貸出要求の増減に應じて増減する可能であるものである。但し、政府及び民間の貸出要求は、必ずしもいなむしろ主として、兌換券を以て拂出さるゝことを求められるものでなく、その大部分は、日本銀行に於ける預け金の形として創作せらるゝことが貸出となるのである。

通貨のうちの最大部分を占むる所の潜在通貨、すなはち、預金の増減は、その主たる原因が、貸出にあることは、前に述べたる所である。併し、前に述べたる資金の形量に於ける増加は、貸出に限るものではなく、銀行が有價證券を買入れても、土地建物を買入れても、苟も銀行が支拂をなしたるときは、その金額は、總て預金の増加となる。何となれば、その代金として支拂はれたるものは、總て受取人によつて銀行に預金とせられるからである。但し、我が國の今日に於ては、銀行が國債を買入れるときは、預金の増加となることなく、むしろ、日本銀行に於ける預け金の減少となる。國債は、今日にては、直接間接に日本銀行より賣出さるゝものであるからである。

預金の増加の原因としては、この貸出若しくは銀行の支拂代金の轉換といふものゝ外に、尙ほ重要なものが四つある。その一つは、前にも少し述べたる如く、金の日本銀行への賣却の如く、商品的金の貨幣的金となることであり、その二は、外國よりの受取金である。外國よりの受取金が圓勘定にて銀行預金となる場合である。

その三は、政府の支拂である。政府の支拂を受けたるときは、民間の預金は増加し、民間資金は増加する。この意味に於て、赤字公債の發行によりて政府が支拂をなすことは、民間資金を増加せしむることゝなるのである。

その四は、日本銀行の貸出である。前に詳しく述べたる所は、主として普通銀行の貸出が預金となる場合のことであつた。日本銀行の貸出も、亦、それと同様に民間銀行に於ける預金を増加せしめる。殊に、日本銀行は、その貸出を預金として受入れたるものを以てするのではないから、貸出に當り、預金の支拂準備なるものを考慮することはない。この點に於て、民間銀行と全く異なる所があつて、發券銀行たる特性より生ずるのである。

日本銀行の兌換準備なるものは、普通銀行の預金支拂準備の如く、或る點に於て、貸出を牽制する作用がある。併し、それは、貸出が兌換券を以て拂出さるゝことを求めらるゝ場合に限るのである。然るに日本銀行の貸出も普通銀行の場合と同様に、小切手を以て行はれ、それが、普通銀行に、そして、それから日本銀行に、預ケ金とせらるゝ場合が甚だ多い。この場合に於ては、兌換準備は、貸出を牽制することゝはならないのである。

日本銀行が、謂はゆる生産設備擴充の目的を以て日本興業銀行を通じて、貸出を擴張すれば、日本興業銀行及び、普通銀行の預金は、それだけ増加することゝなる。

こゝに述べたる四つの事情に基く、民間預金の増加は民間資金といふ立場より見れば、その實量の増加である。

七

資金の實量の増加及び形量の膨脹の事情は右に述べたるが如くである。その逆なる事情が、實量の減少若しくは形量の收縮を惹き起す。

先づ形量の收縮より述べれば、その主要の原因は貸出の返還と銀行よりの有價證券その他の財産の賣り放ちとである。これらの場合には、必ず何人かの預金の引出を以て行はれるから、預金の收縮となる。最近、我が國の主要銀行は、貸出を回收若しくは引締めて、または株券などを賣放つて、國債の買入を行つた。このことは、普通銀行に於ける預金を減少して資金の形量を收縮したるのみならず、その國債の買入は、日本銀行に於ける預金の減少となるのであるから、資金の實量をも減少し、その範圍内に於ては、資金の前に述べたる膨脹の基礎を削減したものである。縦ひ一億圓の國債買入にしても、數億圓の金融逼迫を齎らすことゝなる事情がそこにある。

次に實量を減少せしむる原因の第一は、貨幣的金の商品的金となることである。第二は海外への支拂である。金を以て輸送しまたは外國爲替を買入るゝことは、資金の實量の減少となる。資金の實量の減少は、前に述ぶるが如く、それを基礎とする所の膨脹部分をも伴ふて消滅せしむるものであるから、資金の形量に於ける收縮は著しいものとなる。昨年以來の金融逼迫と金利昂騰の傾向は、この海外拂が主たる原因であつた。

資金の實量減少の第三は、政府への租税の支拂、公募國債の應募、その他の納金であり、第四は、日本銀行の貸出の回收である。これらについては、重ねて詳しく述ぶる必要はない。

八

資金の増減收縮は、右の如き事情によつて起るのである。然るにその中の主要なる預金の増加として現はれる資金の膨脹について觀察するに、それは、前に述ぶるが如く、 a より $a-r$ にまで膨脹するの可能性があるものである。然らば、その可能は、如何にして實現するか。

その實現は一に銀行の貸出は如何にして行はるゝかに依存するのである。何人も知る如く、貸出には謂はゆる對人信用と對物信用とがあるけれども、日本銀行の政府への貸付及び公債の引受の場合を除き、極めて特殊の例外的場合の外は、對人信用と言つても、その背後にある所有財産が、德義的擔保となつて居るのである。従つて、民間の貸出は、結局、物的擔保の上に成立つものと言ふべきである。

果して然りとすれば、資金膨脹の可能を實現するものは、借受人の擔保である。 a が $a-r$ にまで膨脹するの可能の下に、現實に膨脹するの程度は、擔保價值によつて限界せられる。然るに擔保價值なるものは、言はば推測

の處分價值であるから、景氣に左右せられる所甚だ多く、好景氣のときには、一萬圓の擔保價值のものも、不景氣に於ては、下落甚だくし三千圓に過ぎないと言ふやうなことも珍らしくはない。殊に擔保價值は、現實の處分價值ではなく、推測に於ける處分の價值であるから、將來の見込に關する所甚だ多く、この關係からして、資金の膨脹には、心的要素が多分に働くものなるを認めなければならぬ。すなはち、將來が樂觀せられる場合には、資金の膨脹は大であり、悲觀せられる場合には、小である。

また貸出の擔保に供せられるものは、主として商品と有價證券とである。土地建物の如き不動産は、その商業用のものは、長期貸出、特に社債の擔保となるけれども、その他は借金整理の場合を除いては、擔保となることはないから、それが、資金膨脹の根源となる働をなすことは殆ど認められない。

社債擔保となりたる商工業用の土地建物は、その社債はやがて、銀行の預金者が預金を以て買入れて消化せられることとなるのであるから、結局、預金者の預金が、社債發行者の預金に移り換るに過ぎずして、銀行の貸出が預金となるの關係は、それまでの経過行程に現はるゝだけである。従つて、この場合の不動産擔保も、資金膨脹の根源となる働きをもたない。併し、將來、社債擔保となす目的を以て、商工業用土地建物に對して貸出をなしたる場合に、社債發行の機運熟せずして、貸付金のまゝに存続する場合や、または社債として貸出をなしても、これを賣出す機會が未だ到來しない間は、不動産擔保も、資金膨脹の根源となる。

資金膨脹に關聯する所の擔保は、主として、商品と有價證券とである。商品はまた概ね、荷爲替若しくは倉庫證券の形に於て擔保となる。商品と有價證券の市價の變動は、それゆゑに、資金の膨脹の大小に甚だ密接なる關

係をもつものである。

資金の膨脹は、擔保たる商品若しくは不動産の市價の變動によつて左右せられるものなるは、右に述ぶるが如くであるけれども、またもとより、商品そのものゝ増減にも依存するは明かである。従つて、生産が隆盛なる場合には、單に、生産物たる商品の市價の高きがためのみならず、その存在量の大なるがために、貸出擔保の増加により、資金の膨脹は大となるのである。この意味に於て、資金の量は、生産物の量の反映である。また、資金そのものは國富でないけれども、國富の反映であると言ふことは出来る。

併しながら、このことよりして、國富の増加、生産物の増加、そのものを以て、資金と見做すことが出来る譯のものではない。生産物が資金となるがためには、それが荷爲替手形若しくは倉庫證券によつて代表せらるゝ状態となつて、——換言せば、賣買取引の目的物となるか、若しくは、なり得る關係の下に置かれて——それが銀行の貸出の擔保に供せられることが必要である。このことなくしては、生産物の増加は資金の増加となつて現はれることはない。

金準備によりて發行せられたる兌換券の量は、金の價值を反映する所の資金の量である。金の生産は、資金の生産である。それと同じく、今日の發達したる金融機構に於ては、擔保貸出といふことによつて、生産物の量は、その代價より幾分か低き量の預金といふ資金を産むのである。この意味に於ては、生産物は、その賣買に要する所の通貨を、資金を、伴つて生産せられるものと言ふことが出来る。尤もその場合通貨若しくは資金の量は、生産物の代價の量よりは幾分か少い。併しその少い所は既存の資金若しくは通貨を以て補充せられる。

九

資金たるものは、右に述べたるが如き性質をもつものである。そして、その形態は、常に通貨である。ゆゑに、例へば、我が國に於ける資金の全量は幾許であるかと言ふことを明かにせんと欲するならば、通貨量を計算すればよい。兌換券の發行高、補助貨幣の流通高、全國銀行の預金總額、この三者の合計がそれである。いま補助貨幣の流通高は、不明であるからこれを除き、昭和十二年八月末日に於ける現在高を求むるならば、兌換券の發行高の十六億六千萬圓と、全國銀行預金總額百四十七億八千七百萬圓との合計百六十四億四千七百萬圓が、資金の全量であるといふことが出来る。併し、これは、その所有者各個の立場から見たる資金を累算したもので、金融機構の全般に擴つて存在する所を合計したものである。従つてその各個の所有者以外の何人かゞ統括的に利用し得る資金量を表はすものではない。

また、右の合計中には、特別銀行や貯蓄銀行の預金が含まれて居る。それらの預金も、或る立場から見れば、明かに資金であるけれども、他の立場からは資金と認められない。またこの中には日本銀行の預金四億四千三百万圓が含まれて居ない。この預金も或る立場から言へば、明かに資金である。その立場に於ては、これを前記のものに加算しなければならない。併し他の立場に於ては、それは資金と認めなくてもよい場合がある。然る立場に於ては、これを加算しないまゝが正當である。かやうな次第であるから、見る所の立場の如何により、資金の計算は異らざるを得ない。

また例へば、預金者が今直ちに働かし得る資金の量は幾何であるかと言へば、それは、一應、當座預金と特別

當座預金との合計であると言はなければならぬ。また預金者が、結局に於て動かし得る資金の量は幾何であるかと言へば、それに、定期預金、通知預金、その他の預金の量を加へたる合計であると言はねばならぬ。併し、預金者が、定期預金、通知預金を擔保として貸出を受けることを考慮に入れるならば、右の兩者は、結局、同一に歸する。更に、預金者がその有する商品や有價證券や不動産を擔保に供するものとして觀察すれば、その動かし得る量は、右の預金合計よりも更に大きく、且つそれらのものゝ擔保價值を測定し得ざる限り、それは正確に測定することは出来なくなる。併し、その極限は、 a の實量資金に對しては、 $\frac{a}{r}$ 以上に出づることはない。

また、銀行が投資し得る資金の量は幾許であるかといへば、一應の答へとしては、その日本銀行に有する所の預け金、謂はゆる一般預金の中から、交換尻決済に必要な額を控除したものであると言ふことが出来る。併しこの場合に於ても、銀行が日本銀行より貸出を受ける關係を考慮に入れるならば、その量を正確に測定することは不可能であらう。

要するに過ぎ去つた一定の日に於ける資金の量は、その各種の態様の各々について、殆ど正確にこれを測定することが出来る。而も、各種の立場より、これを測定することが出来る。併し、縦ひ明日のことゝ雖へども、將來の資金の量を測定することは、不可能であると言はねばならぬ。資金なるものは、増減するばかりではなく、その膨脹收縮頗る甚だしく且つ常なきものであるからである。すなはち、資金が常に實量に於てのみ存在するならば、これも不可能ではないであらう。併し、資金なるものは、常に形量に於てのみ現はるゝものであり、その形量の膨脹收縮には、心的要素の働きが頗る大きく影響するものだからである。

液體が膨脹したるときは、その濃度が減じ、比重が小さくなる。それと同様なことが資金の膨脹に於ても生ずることがある。それは、資金の膨脹が生産物の増加に伴はずして起りたる場合である。

資金の膨脹が、生産物の増加に伴ひ、生産の隆盛と商取引の殷賑につれて起りたるときは、その購買力の濃度が減少することなく、むしろ、その膨脹が伴はざれば、資金の購買力の濃度は、増加すべき筈の所を、その膨脹により濃度の増加が防げられることとなるものと言ふべきであらう。購買力の濃度、すなはち、資金の單位當りの購買力は、資金の形量と生産物の量との比率に外ならぬものであるからである。従つて、この關係に於ては、資金の膨脹と液體の膨脹との吐噓は當らざるものとなる。

資金の膨脹が、生産物の増加に伴ひて起ることは、前に述べたる所である。すなはち、今日の商業組織と金融機構に於ては、農業生産物たると、鑛業生産物たると、また工業生産物たるとを問はず、換言すれば、食料たると、原料たると、完成品たるとを問はず、殆どその大部分は、倉庫に保管されて倉庫證券を以て代表せらるゝか、または船舶鐵道により運送せられて、船荷證券または貨物引換證によりて代表せられ荷爲替手形の附屬書類となるか、このいづれかの形に於て銀行に擔保として提供せられ、それに對して貸出を受けることとなるのであるから、生産物の増加は、資金の膨脹を伴ふのである。かゝる場合に於て、もし資金が右の如き關係によりて膨脹することがないものとすれば、既存資金の購買力の濃度が増加することとなり、生産物の増加は、物價の下落を來すこととなるのであるが、右に述ぶるが如き擔保貸出の關係によつて生ずる資金の膨脹が、その濃度の増加を妨

げ若しくは緩和することゝなるから、その場合に於ても、必ずしも物價の下落を來すことゝはならないのである。殊に、この場合に於ては、資金の膨脹といふと雖も、その膨脹は、生産物の増加よりは、少き割合に於ける——擔保價值は、賣買價格より少きため——膨脹であるから、資金の購買力濃度の減少といふことは起ることがないのである。すなはち、この場合の資金膨脹は、物價騰貴を來すことなきものと言はねばならぬ。

併しながら、資金の膨脹が、生産物の増加に伴はずして起りたる場合には、生産物の存在量に對する資金の形量が、従前より大となつたのであるから、資金の購買力の濃度は減少することゝなる。その點に於ては、資金の膨脹は、液體の膨脹と同様な事情の下にあるのである。

生産物の増加を伴はずして資金の膨脹する場合といふは、擔保なくして貸出が行はるゝ場合である。その最も著しきは、日本銀行が政府の赤字公債を引受くる場合である。この場合に於て、政府が、その公債によつて調達したる資金を拂出すときは、民間資金は、生産物の増加以前に於て膨脹するからである。そして、この場合に於て、その膨脹資金が、公債の消化によつて、收縮するに至らなければ、謂はゆるインフレーションの状態となる。

また、日本興業銀行が、生産者に對して生産に着手する以前に於て、政府の註文を擔保として貸出を行ふ場合に於ても、それは、既存の生産物を擔保とするのではなく、未だ存在せざる生産物を擔保とするものであるから、この貸出による資金の膨脹は購買力の濃度を減少するものである。購買力の濃度は、前述の如く、既存の生産物の量と資金の形量との比率であるからである。

併しながら、日本銀行引受による公債發行の場合と、日本興業銀行の註文擔保に對する貸出の場合とは、その

膨脹したる資金の收縮の状態を異にする。後者の場合に於ては、その註文による生産を完了し、それによつて代價を受領したるときに、その受領の資金を以て、貸出の返済に充てることによつて、貸出は消滅するけれども、前に受けたる貸出資金が預金に轉換したるその預金は、この貸出の返済によつて消滅することゝはならない。この場合に於ては、日本銀行に於ける政府資金の減少が貸出の消滅に振り替るだけである。

日本銀行の引受けによる公債發行によつて膨脹したる資金は、第一次的には政府資金であり、それが拂出されて民間資金となる。この民間資金は、前に述べたる如く、民間預金者の銀行に於ける預金とその銀行の日本銀行に於ける預け金との二様の状態に於て存在する。従つて、預金者自身が公債を買受くる場合には、完全に收縮するけれども、銀行が公債を買受くる場合には、日本銀行預け金が減少するだけで、預金者の預金としての資金は收縮することはないのである。

かくの如き次第であるから、生産者若しくは生産物の所有者自らが、既存の生産物を擔保として、貸出を受くる場合には、資金の膨脹は購買力の減少すなはち物價の騰貴を來すものではないけれども、然らざるものが、貸出を受くるときは、購買力の減少すなはち物價の騰貴を來すことゝなる。それは、一般の消費者たると政府たるとによつて異なる所はない。政府が自ら消費者として、または消費者たる被救済者の代表として、公債を發行して日本銀行に引受けしむる場合、または貸出を受くる場合には、それによる資金の形量膨脹は、購買力の減少すなはち物價騰貴を惹き起すことゝなるのである。